

薩摩琵琶物語

山本秀雄



私たちは屋久島の琵琶愛好会をつくり、「弹奏しない、聞くだけ」の会を、去る五月二十八日の夜、開催した。

屋久島でもはじめての古式床しい薩摩琵琶の弹奏を拝聴できた。すべて楠川の浦田さんに負うところが大きい。

弹奏者の、鹿児島市郡元町の前村 弘先生(九十歳)に感謝する次第。先生は薩摩琵琶同好会の副会長を経て、現在は顧問として会の指導に当っておられる。かくしゃく、まさに勝海舟の城山の「それ達人は大観す」の詩の如く、または蓬萊山の「千歳松の常磐の色」の詩情をしのぶ思いで四、五曲を拝聴した。その妙音はながく耳朶からはなれることはあるまい。

薩摩琵琶について、一つの思い出がある。

私が十五歳の夏、屋久島・口之永良部島を巡る約一カ月間の遊行をしたとき、——船はポンポン船、約三トン。目的は私の海軍入隊を記念する島めぐり。乗合いは山本一族の老人たち。私が戦死するものと決めての壮行会。

八月某日、早朝に種子島の能野村を出て、屋久島の一湊に寄

港して中食。快晴で、一片の雲もなかった。灘中に親子の海ガメを発見して歓声をあげた。午後、陽の高いうちに口之永良部島の東端、湯向に着いた。湯向は人工的な船着場がなかった。荒波にけづられた丸石だけの海岸に、お互いに手を取りあつて上陸した。遠い昔がよみがえってくる。

船頭の手配よろしく、決められた宿に入る。私は西さんという人の家で、庭に薩摩鶏が群れて寝ぐらに帰ろうとしていた。如何にも私の所有のように連れて入ったが、一人の老人も一緒だった。能野から同行している上妻善六ジイサン。

同族のよしみで後日、大変に親しくさせて頂いたが、本来はこのジイサンに焦点を当て、種子島の琵琶の事を調べて見たいとの思いも膨らんで消える。島外生活の長さに資料も失い、善六ジイサンは亡くなり、二人をつなぐ思い出も今は桑の木のバチ一つ、評判の名器といわれた琵琶も行く方は知れない。どのどなたの手に自慢の音色をひびかせているのか。

善六ジイサンは、おそらく熊毛で唯一人の盲僧琵琶の流れを汲む弹奏者であつたらう。

薩摩琵琶の由来について

前村 弘

まず、琵琶という楽器のルーツはどこかと申しますと、これは遠く古代ペルシア（現在のイラン）にあるといわれています。

この古代ペルシアに発生した琵琶の原形が、或るものはシルクロードを経て中国に渡り、我が国に渡来して雅楽の合奏に用いられる楽琵琶となり、また或るものはインドに入り、更に中央アジアを経て中国に入り、五絃の中国琵琶となりました。世界に唯一現存する、有名な正倉院の螺鈿紫檀の五絃琵琶は唐の時代の五絃琵琶であります。

平家琵琶は楽琵琶によく似ていて、やや小さな形をしています。

またペルシアからインドに入り、インドにあった絃楽器と合体されて印度琵琶となったものがあり、この印度琵琶から、やがて盲僧琵琶が興っています。

盲僧琵琶の由来については、インドに幾つかの伝説が残されています。その一つにお釈迦様がお弟子の巖窟尊者という盲僧に、地神経と土公神の法を授けられ、また妙音弁才天が琵琶の妙音曲を授けたとあります。このよ

うに、盲僧琵琶は盲僧が琵琶の妙音を奏でつつ、お経を読み、仏の教えを説くものであったことが分かります。

このインドの盲僧琵琶が中国の盲僧に伝えられ、更に我が国の九州に伝来しています。我が国にも、今から千四百年ほど前に日向の鶴戸の岩屋で修業を積んでいた盲僧に、中国から来朝した盲僧が地神経と土公神の法と琵琶の妙音曲を授けたという伝説が残っています。このことから、南九州の地にも古くから盲僧が居たことが分ります。

その後、九州の盲僧を筑前盲僧、南九州の盲僧を薩摩盲僧と呼ぶようになりますが、この間、伝教大師が延暦寺建立の際、京都に平安宮造営の際など、度々、地神鎮めの法を修するため盲僧を都へ召されたことがあり、そのうち京都に留まった者があり、京都に正法山妙音寺常楽院を建立し、京都盲僧が興っています。

やがて時代が下り、今から八百年余り前、源頼朝の命によつて島津忠久公が薩隅日三州の守護職に任ぜられた時、常楽院第十九代院主宝山檢校は島津家の祈禱僧となつて共に鹿兒島に下ることになりました。

忠久公は、日置郡伊作（現在の吹上町）に常楽院を建立し、宝山檢校が初代の院主となつて日夜、地神経を誦し、琵琶を奏でつつ国土の安全を祈つたといひます。宝山檢校はまた

盲人を教え導き、盲僧のたばねとして弟子達とともに諸国を行脚し、琵琶を奏でつつお経を誦し万民の利濟を祈つたといひます。

このようにして代を重ね、今から約四百五十年前、第三十一代淵脇寿長院は殊にすぐれた盲僧で、琵琶にも秀でていたといわれます。また当時の加世田の領主は島津日新斎忠良公で、儒教、佛教の両道を極め、生前に菩薩の称号を授けられたほどの大人物でありました。忠良公は寿長院の琵琶の妙音を耳にされて、琵琶を武士の修養のために役立てることを思いつかれ、寿長院に改造を命ぜられて今日の薩摩琵琶が生れたわけであります。

忠良公がどのような考えで薩摩琵琶を造られたかは、自らお作りになられた「春日野」、「武蔵野」、「華の香」、「迷悟もどき」などの歌によつて、はっきりと理解することが出来ます。「武蔵野」は若者に対して人生のはかなさを説くと共に若いうちから勉学、修養に勉むべきであることをさとされています。「華の香」は花の香によせて、花にも優る美しい人もやがては老い果てることの道理を説き、婦女子へのいましめとしたものです。「迷悟もどき」はもろもろに起りくる迷いをすてて、悟りの道へ進むべきことを説かれてあります。全て仏教、儒教の教えをもとにした教訓歌であります。

忠良公のねらいは、娯楽のうちに武士とし

ての修養を積むことにあつたわけで、豊かな情操を養い、武士として人として生きてゆくべき道を知り、或は人生観、死生観を養い、武士として常に潔く事に処する道を得るにありました。忠良公のすばらしさは、琵琶の妙音にひかれつつ自然とこれらの教えを身につけさせるといふところにあると思います。

さて、その後、義弘公の時代になり、小敦盛や木崎原などの戦記物が歌われるようになり、戦いの状況を表現する「崩れ」といふ弾法

があみだされ、音楽的要素が深められて参りました。

また後になって、風流を詠み、もののあわれを歌う情緒ものも歌われ、明治後半には日清・日露の戦さ物や忠君愛国の思想を鼓吹するものも現われるようになりました。

さて、このように時代を反映していくらかの変化は加えられました。明治維新以前は専ら武士の趣味として、土風の作興に役立つてきたものでありますから、薩摩琵琶は、あ

くまでも華やかで飾り気の多いことを嫌い、かつて須田伝吉翁が「古木に梅一輪」と申されたように、年古りた梅の木に一輪の花をつけたほどの風情を尊んだのであります。

従つて、薩摩琵琶の真髄は、単に琵琶を弾き或いは聴いて楽しむというだけのものではなく、弾く者も聴く者も真に歌の意味を汲みとり、己れの日常の生活に、或いは人生に、これを役立てるといふほどの心がけが要求されるものだと思います。

前村 弘 氏略歴

大正二年、鹿児島市に生れる。

昭和十年、鹿児島高等農林学校卒業後、教師となり県下の各学校に勤務する。昭和二十二年より十八年間、鹿児島市の鹿児島園芸高等学校に果樹担当として勤務。

屋久島関係では、お父さんがぼんかん園を経営しておられた市橋宏行君（卒業後は警察庁に勤務）や、屋久町中間で熱帯果樹園を経営している岩川文寛君は教え児です。

薩摩琵琶は旧制中学を卒業した十九歳の時より稽古を始めましたので、七十年に亘つて薩摩琵琶を楽しんだことになりましたが、出征中や戦後は長く琵琶から遠ざかっていました。今でも若い方々の刺激になると思つて、薩摩琵琶同好会の大会では演奏をしています。

長いこと薩摩琵琶同好会副会長として運営にあたりましたが、現在は顧問をしています。

【写真は八十二歳の誕生日】

